



撮影 篠山紀信

2026年

1月17日[土] - 6月28日[日]

10:00 ~ 16:30 (最終入館 16:00)

月・火曜日休館 ※祝祭日の場合はその翌日 ※4月28日~5月6日は開館

入館料/一般 ¥700、高大学生 ¥420、小中学生 ¥140 ※常設展を含む

【連続企画】特集展「変幻するエッセイ」2026年7月1日[水]より開催予定

山中湖文学の森

三島由紀夫文学館

Yamanakako Forest Park of Literature Mishima Yukio Literary Museum

山梨県南都留郡山中湖村平野 506-296 TEL 0555-20-2655

主催 | 山中湖文学の森 三島由紀夫文学館、山中湖村教育委員会

協力 | 株式会社篠山紀信、株式会社エフエム富士五湖

後援 | (一社) 山中湖観光協会

特集展 生を象る エッセイ

三島由紀夫は割腹自殺をした人なので、変な人だと思われているかもしれませんが、どう考えてもあの人は変な人です。「変な」というのは、もの凄く優れているという意味でもありません。

三島は小説も戯曲も面白いのですが、生の声なまを響かせたエッセイや評論にも、いい作品がたくさんあります。視点が独特で、常識を覆す鋭い意見が特徴です。そのエッセイを展示で紹介してみようと試みました。資料とともに、引用された一文をお楽しみください。

館長 佐藤秀明

——人間を殺すものは古今東西唯一《死》があるだけである。

(「重症者の兇器」『人間』第3巻第3号、鎌倉文庫、1948年3月)

chapter 1

文学青年の戦争体験

戦時中に青春期を過ごした三島由紀夫。三島の青春期は、否が応にも免れることのできない戦争の影響を受けつつも、戦争とは遠い場所で、文学に対する意欲を育んだ時期でもあった。終戦を迎えると三島は、世相の大きな変化に戸惑うこととなる。その心の動きは、彼自身の文章の中に克明に刻まれている。

——一九四五年から四七、八年にかけて、 いつも夏がつづいていたような錯覚がある。

(『小説家の休暇』大日本雄弁会講談社、1955年)

20代から30代にかけての三島由紀夫は作家活動に勤しむ一方で、数々のエッセイも執筆し、発表している。三島のエッセイを辿ってゆくと、一個人としても作家としても“戦後”という時代に囚われる姿を見出すことができる。それはやがて三島の文学をはじめとしたあらゆる作家的営為、ひいては人生上の主題として大きなものとなってゆく。

chapter 2

戦後作家としての出発、 時代へのまなざし

——毎日死を心に当てることは、毎日生を心に当てることと、 いわば同じことだということを「葉隠」は主張している。

(『葉隠入門』光文社、1967年)

chapter 3

二律背反の思想

——文学と行動・生と死

「葉隠入門」を書いた三島由紀夫は、生きることと死ぬことを表裏一体の関係として捉えていた。三島は常に背反する2つの事柄の一致を試み、その張り詰めた緊張感の中を生きingことを是としていた。晩年、三島が到達した美学や思想の片鱗はエッセイに散りばめられている。

次回予告

特集展

変幻するエッセイ — 冴えわたるペン

7月1日 [水] — 12月27日 [日]

会期中、第20回レイクサロン開催予定!

※詳細は追ってお知らせいたします。

山中湖文学の森 三島由紀夫文学館

山梨県南都留郡山中湖村平野 506-296

TEL 0555-20-2655 FAX 0555-20-2656 Mail info@mishimayukio.jp

ホームページ

X

Instagram



交通案内

路線バス：富士山駅から約25分/御殿場駅から約40分

バス停「文学の森公園前」下車 徒歩8分

高速バス：山中湖旭日丘バスターミナル下車 徒歩15分

自家用車：山中湖ICから国道138号線を御殿場方面へ4km

〈お車でお越しのお客様へ〉

文学館を含む周辺一帯が同一住所であるため、カーナビでの目的地設定の際、住所検索以外での設定をおすすめします。